

式辞

長かった冬もようやく終わりを告げているような気がいたします。ここ十勝の肥沃な大地にようやく春の兆しが見え始めてまいりました。4月になれば遅かった北の地に眩（まばゆ）いばかりの緑が鮮やかに芽生え始めることになるでしょう。十勝ならではの、真つ黒な土が顔を出し、生命が息づき始めることとなる、そんな季節が待ち遠しい限りであります。

さて、この良き日に北海道大谷学園連合会主事・加藤真樹（かとう・まさき）様をはじめとし、多くの御来賓の方々をお迎えして、平成28年度帯広大谷短期大学第56回卒業証書・学位記授与式を挙げていきますことは、私ども帯広大谷短期大学の教職員にとりまして、誠に喜ばしいことでもあります。

さて、この度卒業を許可された地域教養学科28名、生活科学科栄養士課程35名、社会福祉科子ども福祉専攻48名、同介護福祉専攻21名、計132名の学生諸君、御卒業おめでとうございます。皆さんはそれぞれ学科・専攻所定の専門の単位を取得し、本日ここに卒業という（ハレ）の舞台に臨むことができたのです。二年間の皆さんのたゆまぬ努力に対し、心から敬意を表するとともに、お祝いを申し上げたいと思います。

さて、この素晴らしい門出にあたり、今皆さんは一体どのような気持ちでいるのでしょうか。なんとも言えない誇らしい気持ち、保護者の皆さんや恩師への感謝の気持ち、あるいはクラスメイトとの楽しかった日々、など。様々な思い出が溢れ出し、自分の中で整理仕切れなくなっているのかもしれない。

さて私から二点だけ、この卒業式を機にみなさんに申し上げたいことがあります。

一つ目は、「学ぶ」ことについてです。学ぶという本質をみなさんは確かにこの大谷短大という学び舎で体験できたのだと思っています。高校までは基本的に「学ぶ」とは与えられた知識を覚えることだったはずですが、しかし、帯広大谷短期大学という場に入ってから皆さんが「学ん」だことは、答えは一つではない、ということ、常に今ここにある常識を疑ってみること、そしてそこから、新しい世界が開けてくること、だったはずですが、学ぶことの奥底にあるのは、自分は何にも知らないという残酷なまでの現実、そ

して新たに知るということは、快感ではあるけれどもそれだけにとっても大変な取り組みであるということでした。実はそれをわかりさえすれば、十分卒業に値する、私はそう思います。

そして何かしら、自分の納得する真理に近づけた時の高揚感と喪失感はまさに大学という場における学問の醍醐味であると思います。大阪大学名誉教授で哲学者の鷲田清一（きよかず）氏は小説家・高橋源一郎氏の編著である岩波新書「読んじやいなよ！」の中で、バーナード・ショーの次のような言葉を引用しています。

「何かを学びましたな、でもそれは最初は何かを失ったような気がするもんです」。

今までの自分の内に築いてきた前提が崩れていく瞬間の喪失感と新たに気がついた世界への喜び、そんな二つの交錯する時間が学ぶということの醍醐味なのだ、鷲田氏はそんな風に語っているように思います。学ぶとは常に過去の自分と決別し、新たな自己と出会っていく、そんな稀有な体験なのだ、そう思います。皆さんはこの2年間でどれだけそんな豊かな経験をしたのでしょうか。いずれにせよ、この経験は皆さんの一生の宝物になると思いますし、また、これからの輝ける人生において圧倒的な〈力〉になると思います。どうか、本学で培った「学ぶ」という「武器」を存分に駆使して、次世代の中心として活躍されることを期待します。

もう一点です。それは本学の「建学の精神」とも繋がってきますが、「共生（共に生きる）」ということです。人間はたった一人では生きていくことはできません。皆さんもそれぞれの人生で必ず誰かに助けられたりしたことで、苦境を切り抜けてきた経験があるでしょう。人は一人では絶対に生きてはいけません。しかし、と同時に人は「俺が俺が・・・、私が私が・・・」となってしまうのです。いわゆるエゴイズムが目覚まし、相手の足を引っ張るだけ引っ張り、自分だけがよければいい、そんな気持ちがムクムクと鎌首をもたげてくるのです。誰でもそんな気持ちにとらわれる瞬間がある。実は、その時が重要で、そんな自分を果たして許せるのか、どうか。そんな気持ちが湧いてきたら、どうか、ちよつと立ち止まって我が身を振り返ってみてください。そして、他者と共に生きていくという現実をなんとか体感するように努力してみてください。思いがかなったその時、きつと穏やかで安らげる時空間が私たちの元に降り注ぐと思います。

以上、「学び続けて欲しい」こと、「共に生きていることを実感して欲しい」こと、この二点を皆さんへのはなむけの言葉として送りたいと思います。

この混迷した現代は、皆さんのような柔軟な思考力を持った若者を必要としています。皆さんの若いエネルギーな生命力に期待がかかっているのです。どうか、臆することなく、かといって背伸びすることもなく、まさに常に「考え、共生する」ことを第一の願いとして社会の重要な構成員となって羽ばたいてください。心から期待をしています。

保護者の皆様、本日は誠におめでとうございます。この2年間の皆様の大変さを思う時、心より敬意を表したいと存じます。この2年間、本当にお疲れ様でした。学生たちは2年間、多くの体験をしたことと思います。もちろん、楽しい経験ばかりではなく、それ以上に辛いことを乗り越え、本日この場にいるのです。どうか、褒めてあげてください。そして、どうぞ、喜んであげてください。彼らは間違いなく一歩も二歩も成長を遂げ、新しい世界に旅立とうとしています。これからは是非見ていてあげてください。そしてなにかあったときには、人生の先達として、ご助言をいただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本日お集まりをいただきましたご来賓、そして保護者の皆様、そしてなにより卒業生諸君のこれからのご健勝とご活躍を心からお祈りいたしました。私の式辞といたします。

平成29年3月17日

帯広大谷短期大学学長

田中 厚一